「共生社会」を実現するために私たち高校生がすぐに取り組むことができるのは、ボランティア活動である。地元の清掃活動、イベントの手伝い、募金活動、災害復興、老人ホームの慰問など、学校や公共施設の掲示板などにもポスターが貼られ、身近な問題として感じられるようになってきている。しかし、参加しているのは一部の人に限られているのが現状だ。内閣府の「令和元年度市民の社会貢献に関する実態調査」によれば、一年間にボランティアに参加したことがない人は八三％もいたという。ボランティアの意義や必要性は理解しても参加しない人がこのように多いのはなぜだろうか。

ボランティア活動に参加することをためらう原因を、経済的側面、時間的側面、心理的側面から考えてみたい。

ボランティア活動は「無償性」が原則だといわれている。それは当然のことだとは思うが、高校生にとっては現地までのわずかな交通費であっても大きな負担となる。大学生や社会人であっても同じだろう。経済的な負担が大きければ継続的な活動を行うことはできない。

時間的な問題も同じことだ。高校生は決して暇なわけではない。勉学や部活動等に一生懸命取り組み、毎日毎日が精いっぱいなのだ。これ以上負担を増やしたくないと思う気持ちもよくわかる。

さらに、心理的な不安や抵抗も拭いきれないものだ。「自分に何ができるのか。」「かえって迷惑になるのではないか。」「一度だけの参加では相手の人に失礼だろう。」など、責任感の強い人ほど参加をためらうことになりがちである。

しかし、これらの諸課題についてはそれぞれ対策をとりうるのではないか。例えば、経済的側面では、交通費や材料費などを報酬としてではなく活動上の実費として弁償する方法がとれるだろう。すでにこうした予算措置を講じている団体も少なくないと聞く。福祉行政としてもこうした措置を積極的に取り入れていくべきだと考える。

時間的側面では、ボランティア活動を学校の特別活動に取り入れたり、特別科目の修得単位として認めたりする方法が考えられる。学校行事に取り入れると「自主性・自発性」が損なわれるのではないかと懸念する見方もあるだろうが、

目的を明確にし、活動の種類を選択できるようにすれば、活動に参加する動機づけになると思われる。

心理的側面は、施策として制度改革したからといってすぐに改善されるものではない。ボランティアの活動内容や魅力などをしっかりと伝え、気軽にまずは始めてみようと呼びかけていくことが大切だろう。ボランティア活動の魅力の第一は、さまざまな人と関わることができる点にある。息苦しい日常を離れてちょっと「いいこと」をしてみることによって、自分が「誰かの役に立っている」ということが実感できれば、明日への希望も生まれてくる。

こうした対策はさほど困難なことではない。できることから改善していき、少しでも多くの高校生がボランティア活動に参加できるようにしていきたい。